



川嶋昭二：コンブの生涯学習の場を目指して～えりも町郷土資料館・水産の館の場合～

北海道の背骨といわれる険しい山々が連なる日高山脈の南端がゆるやかな草原大地となり太平洋に沈み込んでいくところが観光客の人気を集めている襟裳岬である。この襟裳岬があるえりも町はJRのローカル線も達しない、人口6,500人ほどの小さな町であるが、300年以上の昔から昆布場所として開拓された歴史を持ち、ミツイシコンブを生産する日高支庁管内の中でも最大の生産地として知られている。町勢要覧(1997)によれば1996年の同町のコンブ生産は漁業総生産額61億円の42%、25億8千万円に達している。このようにコンブ漁業はえりも町最大の産業であるが、過疎化が進むなかで将来これを受け継ぐ青少年はもちろん、一般町民にも地元のコンブにもっと親しんでもらうなど、後継者育成のための生涯学習が検討されてきた。その活動の拠点が町の中心の役場や商店街に近い国道沿いにある「えりも町郷土資料館・水産の館」である。元来、これらの施設のうち「水産の館」は1981年にコンブとサケ、マスを中心にえりも町の水産業を紹介する水産振興センターとして開設されたが、1996年4月以来2年間にわたり展示内容を全面的に改修して今年4月に再開した。また、郷土資料館は1992年に「水産の館」と棟続きで新設され、水産以外の郷土資料の保存展示や学習活動が行われており、両者はえりも町教育委員会により一体の施設として運営されている。

新しい「水産の館」の展示は次の4項目に基づいて行われた。(1)えりも町を代表するコンブを中心テーマとし、さらに身の回りにあふれる自然と漁業を通してえりもの海の多様性を表現する。(2)対象を地元の人々、特に児童、生徒や昆布漁家とし、地域とのつながりを重視した教育機能を持たせる。(3)見るだけでなく、みずから体験し実感できる展示とする。(4)基本的展示物を厳選し、これを補う標本や資料を随時追加展示できるようにする。

新装成った館内に入ると、まず最初の展示室ではえりも町の海の自然と漁業をパネルと標本、模型などで学ぶ2つのコーナーがある。自然のコーナーは4テーマに分かれ、「磯へ行こう!」では磯で見られる海藻や

北海道大学大学院理学研究科、馬渡峻輔先生の研究室の院生諸君の協力による小動物標本とその観察方法、「海と山のつながり」では森と海の密接な結び付き、「海流と干満」では日本周辺の海流や水温分布、あるいは干満など海洋学の基礎を学び、最後に「えりもの海」では自分たちの海の年間の水温変化や海底地形、地質と主な魚種の漁場位置の関連が会得できる。また、漁業のコーナーでは「えりも町の漁業」としてサケ類をはじめ地先の主要漁業や「資源をふやす」ために地元で取り組んでいるウニ、ハタハタの種苗生産、放流事業が紹介されている。

さらに奥の展示室は本館の目玉であるコンブの学習室である。ここではまず「世界のコンブ」と「北日本のコンブ」の主な種類と分布が詳しく説明されており、特にカリフォルニアと北欧産のグリセリン標本が目玉を引く。しかし、何と言ってもこの展示室の圧巻は円形に湾曲した見上げるように高い壁面のケースに納められた北海道産の「ふるさとのコンブ」20種類36点のグリセリン標本である。これらは全道各地の水産技術普及指導所や漁業協同組合の協力により集められたもので、これほどの種類のコンブ標本が一堂に常時展

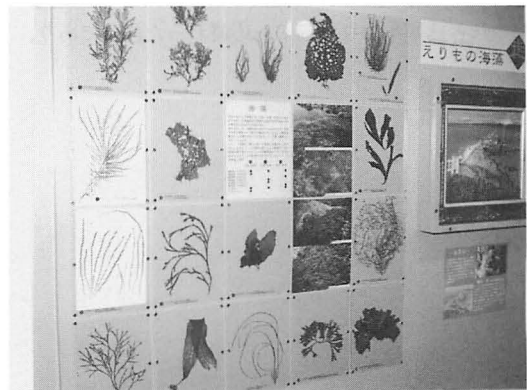


図1. 「えりもの海藻」。磯で見られる海藻のおしば標本。右端には襟裳岬の眺望を海藻で描いた「海藻絵」(渡辺勇さん作)が展示されている。



図2. 大壁面を飾る北海道産コンブのグリセリン標本と、ミツイシコンブの生活史を示すパネル（中央下）。

示されるのはこれが初めてのことである。特にこのうちミツイシコンブはえりも町沿岸の11地先と近隣の類似町、浦河町および静内町を代表する標本14点が集められていて、同じ種類でありながらこれだけの多様性があることに来館者はきっと驚かされることだろう。また、北海道大学理学部附属海藻研究施設の本村泰三先生の協力によるミツイシコンブの生活史パネルが置かれているが、胞子体の成長過程は幼体から成体まで実物標本で示されている。ミツイシコンブの採取から製品出荷に至る昆布漁業の様子や流通、利用面、あるいは漁場の磯掃除などの解説も地元の漁業協同組合や昆布漁家あるいは北海道内外の業界の協力によって写真や珍しいサンプルが陳列されていて楽しく学べるように工夫されている。

今回の展示改修で館内施設は格段に向上したが、まだそれらは基本的な整備が一応終わった段階であり、

今後も児童、生徒を対象とした触って学べる標本など身近な教材や、あるいは昆布漁業者の要望に応えられるような専門的資料の収集とそれらの検索、閲覧機能の整備など、地元と密着し教育的機能を果たすための一層の充実と工夫が必要である。

「水産の館」の最大の強みは目の前に海という大自然の恵みを持っている事である。この施設の運営について望むことは、日常活動のなかにこの広大な磯と昆布採りの人々が働く浜辺を学ぶ場として存分に取り入れて欲しいことである。そこには限られた展示室では飾りきれない無限の教材が満ちている。これらの教材を十分に活用するかどうかが「水産の館」が目指すコンブと昆布漁業の生涯教育が本当に成果をあげるかどうかの分かれ目になるのではないだろうか。都会的生活や文化を基準にすれば決して恵まれているとは言い難い地方の小さな漁業の町、えりも町がこのような博物館を運営することは大変なことであろう。しかし、個性的なこの施設から独自のコンブ文化を町の人々に発信し、300年来の伝統的昆布漁業をしっかりと守り育てて頂きたいものである。皆さんも襟裳岬に観光で訪れるときは「水産の館」にも忘れずに足を運んで下さい。

（昆布研究家 041-0841函館市日吉町4-29-15）

【えりも町郷土資料館・水産の館】

所在地：〒058-0203 北海道幌泉郡えりも町字新浜207、

TEL & FAX：01466-2-2410、

交通：苫小牧・様似間JR日高線、または札幌・浦河間高速バス（道南バス）、いずれもJRバスに乗り換え

「しゃくなげ公園」下車、開館時間：9:00～17:00、

休館日：火曜日・祝日の翌日・12月30日～1月6日。

入館料：無料。